

月刊みんぱく 11月号

2024



特集

今日の縄文ism

巻頭エッセイ
譽田 亜紀子

土偶妄想のススめ

こんだ あきこ
響田 亜紀子
文筆家

プロフィール
岐阜県生まれ。京都女子大学卒業。
奈良県橿原市の観音寺本馬遺跡の
土偶との出会いをきっかけに各地
の博物館や遺跡を訪ね歩き、土偶
や縄文時代の研究を重ねている。
先史時代に関する著作多数。近著
に『こんだあきこの わたしの偏愛
遺跡旅』（新泉社）がある。

私は「世界で唯一土偶に養われている女」を自認している文筆家である。

……この人、大丈夫かな？と思った読者もいることだろう。しかしながら本当だから仕方がない。

日本の先史時代（縄文・弥生・古墳）を中心に執筆や講演を行なっている。それもこれも土偶に取り憑かれ、導かれ、土偶および縄文時代の魅力を発信するのが生業になったからである。それが今回のような寄稿につながっている。

さて。

土偶とは一体なんなのかと問われれば、「縄文時代に粘土で作られた人形の焼物」ということになるのだが、ではなぜ土偶が作られるようになったのか、目的は何か、誰が作っていたのか、何を象っているのか、など様々な問いが立てられるが、真実は縄文人にしかわからない。研究者といえど「こうだった可能性が考えられる」としか言えない。だって、本人（縄文人）たちが文字として明確な答えを残していないのだから。

発掘された状況や当時の自然環境など、ありとあらゆることを考えても推論しか言えない。真実に近づきたいと、研究者が土偶とにらめっこしているのが現状だ。

つまり、断定できることがないのが土偶なのだ。白黒つけたがる現代にあって、「縄文人しか真実はわからないよね」なんてことがまかり通り、対峙する現代

人に、考え妄想する喜びを存分に与えてくれる。これが土偶最大の魅力だと思っている。なんて贅沢で豊かなことなんだろう。

ところで先日、縄文時代に魅了された人に話を聞いた。妙齢のその女性は、先代社長の父親に代わって会社を継いだ。しかし、その後の数年は社内での対立や争いが絶えず、疲弊きつたという。争わないと組織は回らないのか。本当は争いなど好まないのに。「寝るときに、このまま朝、目覚めなければいいのにとまで思うようになっていたんです」という話に言葉をなくす。そんなときに彼女は、縄文時代は日常的な小競り合いはあるにせよ、大きく争うことなく社会が運営されていった可能性があるという世界観に触れる。その話を聞いて肩の力がふっと抜け、楽になったと彼女は笑う。「ああ、私は間違っていたなかつたんだと思いました。人は争わなくてもいいのだと」

土偶にしろ、縄文時代にしろ、真実はどんなものだったのか現代人にはわからない。それでも私を含め、多くの人々を救い、励まし、楽しませ、人生を変えるような転機を与える土偶や縄文時代に触れることは、生きていく上で大いに意味がある。わからないことを楽しむ、妄想する。それを生きていく力に変える。

土偶に養われている女としては、その楽しみ方を強く読者に推したいのである。

月刊
みんぱく
2024年11月号

表紙
大森準平
《Neo Jomon Dogu Gold》
2018年
大きな目でウインクしている
黄金土偶。陶芸家の大森
準平氏は縄文をモチーフに
数多くの陶芸作品を生み出
している（大森準平撮影）

*本文中、撮影者・提供者を
記載していない写真は執
筆者の撮影・提供によるも
ののです。
*本誌掲載記事の無断転載
を禁じます。

- 1 巻頭エッセイ
土偶妄想のススめ
響田 亜紀子
特集 **今日の縄文ism**
- 2 「縄文ルネサンス」到来
古谷 嘉章
- 4 超縄文をめざす「アート&考古学」
中村 大
- 6 土偶とエロス
小田山 徹
- 8 土偶マイム
白鳥兄弟
- 10 今日の縄文istたち
JOUMON 甦りと創造 大森 準平
縄文魔女術 谷崎 榴美
縄文グッズ 小林 亨
大島托の縄文タトゥー 神本 秀爾

- 12 みんなく回覧板
- 14 推しコレ図鑑
イモ仮面…いや、イモ精霊
きしもと タロー
- 16 ふらりミュージアム
ソロモン諸島国立博物館
藤井 真一
- 17 世界の「乗っちゃえ!」
軽トラのススめ
門田 岳久
- 18 だって調査だもの
家と近所づきあいがなくなる
松井 梓
- 20 ばくっ!とフィルめし
母はおなかからっぽを見逃さない!?
川本 直美
- 21 今月号の地図・編集後記



縄文造形家である猪風来(いふうらい)氏主催の「縄文野焼き祭り」では、土器や土偶などを縄文時代の技法と同様の「野焼き」で作成する(岡山県 新見市 猪風来美術館、2023年)



猪風来《土夢華・宇宙創生》 縄文野焼きで制作した現代縄文作品 「現代縄文造形三人展」(岡山県 備前市立備前焼ミュージアム、2021年)

ここ二〇年ほど、一般の人びとの縄文文化への関心が高まってきた。そのあらわれとして、わたしが「縄文ルネサンス」とよぶ現象、つまり「知らなかった縄文文化(のモノ)に、気づかなかった価値を見出だし、現代社会に生きるわたしたちの生活に活かす、多種多様な現象」がある。まず、遺跡や博物館を実際にあるいはSNSを介して

人間が作り出したモノは、しばしば作り手より長生きして、ときには何百年も何千年も生き残る。日本列島を舞台に一万年以上続いた縄文時代に作られたモノのなかには、石器や土器や土偶のように、現代まで辿り着くものも多い。偶然出土したり意図的に掘り出されたりして姿をあらわした大昔のモノは、わたしたちをどのような行為へと誘うのか。

現代まで生き残る大昔のモノ

「縄文ルネサンス」到来

ふるや よしあき
古谷 嘉章

九州大学 名誉教授

訪れて縄文時代のモノに親しむ人びとが増え、縄文遺跡の世界遺産登録も与って活況を呈している。

縄文に触発されたモノ作り

現代人が縄文時代の遺物に見出だす意味や価値は人それぞれで、ますます多様化しているが、縄文時代のモノに触発されてさまざま



荒井恵子《祈源II》 藍染廃液や墨で染めた和紙の造形+縄文土器
第21回縄文コンテンツ展 in ふなばし「とびはくへのトビラ ~縄文と出会う~」(千葉県 船橋市 飛ノ台史跡公園博物館、2022年)



特集

今日の縄文ism

日本列島一万年の文化が いま熱い!
土偶や土器だけじゃない 多彩なクリエイション
令和の縄文アートに縄文人が嫉妬する!?

堀江武史《ウルトラ・スカルプチャー》2015年(モデル:秋田県漆下遺跡出土土偶)
合成樹脂製の土偶作品。土偶の模造品も堀江氏制作 ©Takeshi HORIE

松井利夫《黒漆碗型土器(銘 二本松)》2015年 「遺跡茶碗」と菓子
菓子:加藤祐基(京都市 京都芸術センター、2015年、森川諒一撮影)



超縄文をめざす「アート&考古学」
いい感じのゆるい同じさ
「アート&考古学」は、現代アートと考古学がそれぞれの知識、手法、理論をもち寄り、あらたな思考を切り拓こうとする試みである。現代アーティストと縄文考古学者

なかむら おおき
中村大

立命館大学リサーチ・アドミニストレーター

は異なる活動をしているようにみえるが、人間や文化の「多義性」を理解しようとするまなざしは同じである。多義性とは、ひとつの物事に対し、いくつもの解釈や意味づけができることをいう。ある物事の理解の仕方は人それぞれでも、差異のなかに見つかる「同じさ」に注目し、共通の認識をもつことは可能だ。「同じさ」とはカテゴリーの仕方ともいえ、それ次第で物事の見え方が変わる。わたしたちは「いい感じでゆるく」この「同じさ」をとらえようと試みてきた。それにより異なる物事を関係づける、あらたな発想を生み出すことが可能になるからである。ここから新しいコラボレーションが始まる。

たとえば土偶の気持ち

二〇一五年に開催した「明倫茶会 超縄文」では、「土偶・Play time」の試みを披露した。土偶について考古学者と勉強会をお



堀江武史《ウルトラ・スカルプチャー》 土偶の模造品による構成
「縄文遺物と現代美術 考古学から生まれるアート」展
(新潟県 津南町 農と縄文の体験実習館 なじよもん、2018年)

なモノが作られているという現象が目を引き。実際に作られるモノは、遺物の(広い意味での)「複製品」、遺物や遺跡に触発された「アート作品」、遺物や遺跡のイメージを活用した「商品」に大別できるが、重

なり合いも多く、峻別は難しい。
例えば、土器づくり同好会やワークショップで土器や土偶をお手本として作られる膨大な数の(玉石混淆の)複製品や模造品、実験考古学的研究に基づく卓越した技術で製作される展示用の精巧なレプリカ、縄文人の思想についての独自の解釈を造形として表現した「現代縄文作品」、遺物や遺跡からインスピレーションを得て制作されたオリジナルの現代アート作品、遺物から着想を得て作られた販売目的の雑貨や装身具や食品などのグッズ。そのどれもが遺跡・遺物との出会いの所産という点では共通するが、現代人の製作・創作意欲を刺激したのが縄文文化のモノのどのような魅力なのかは一樣ではない。原初的な根源性、異界との交感、自然との共生、超絶的な技術、独特の造形美、外見の可愛さなど、千差万別である。
「縄文ルネサンス」におけるモノ作りは、縄文人から贈り物を受け取るだけの一方的なものになりがちであるが、それが互恵的なものであってほしいとわたしは思う。つまり、縄文時代の遺物に触発されて現代人が作る新しいモノが、縄文人のモノ作りについての理解を深めることに役立つならば、



アクセサリブランド《Do_goods》
遮光器土偶をミニチュアで再現した純銅製ペンダント(甲府市、2024年、遠藤千昭撮影)



石原道知《土・革》
縄文土器(左)とそのモデルかもしれない革製品の復元作品(右)
縄文コンテンポラリーアート展 in ふなばし2009「縄文ビュア」
(千葉県 船橋市 飛ノ台史跡公園博物館、2009年)

それはわたしたちから彼らへの価値ある返礼となるにちがいない。



土偶・Play time (平井優子・前田英一) 衣装:前田征紀(京都市 京都芸術センター、2015年、森川諒一撮影)

こなったパフォーマンスたちが、東日本の縄文時代で広くみられる土偶のポーズを真似



1



2



3



4

人工物にも同様のエロスを見出だすのだ。棒の幹や枝のしなやかな梨地の木肌とその曲面はいつ見てもうっとりとしてしまう。果実が実り始める前の膨らみ、手のひらにすっぽり収まる触りごこちのいい丸石、幾多の手で磨かれた階段の手すり、何百年も踏み続けられた石の階段、液体を入れる古代の壺の膨らみ、蛇のしなやかさ、など無限に世界の細部にエロスが存在する。同じものを土偶や地母神像にも見出だすのだ。太古の人びとの感覚にも同様のものがあつたのではないかと思う。

女性たちの祈りと造形の感覚

勝手な想像だが、これら土偶や地母神像の作者の多くは女性だったのではないか。多産や出産の安全を祈る目的として、自らの、同胞の身体的特徴と変化を体験的に認知しているからこそ、土偶は出産の主体である女性自

- 1:「小牧野石棒」青森市 小牧野遺跡にて遺跡の隣の畑に転がっていた
- 2:「ヤツデ」京都市 東山区にて息子がヤツデの葉の上には神様がいてとって拝んでいた
- 3:「銀杏」青森県 北金ケ沢にて銀杏の気根。垂乳根(たらちね)とよばれる
- 4:「縄文のビーナス」京都市 左京区にて陶芸家、大森準平氏作の土偶本歌取りのお守り

「土偶に類似する自然のなかのエロス」photo by Koyamada

て土偶の気持ち想像し表現するものだ。縄文土偶に対する理解を、論文や展示とは違うあらたなスタイルで表現している。見ている人たちも同じようなポーズをして楽しんでもいい。自由な茶会なのである。茶会では「遺跡茶碗」で桑の葉茶を飲んだ。「遺跡茶碗」という焼き物はあらたな遺跡保存のスタイルでもある。これは京都市内で発見された江戸時代の建物跡の柱穴の型をとり、そこに別の遺跡から掘り出した弥生時代の水田跡の土をはめ込み、焼き上げたものである。柱穴と茶碗には対象物を受ける凹みという「ゆるい同じさ」がある。内側には漆を塗り重ねることで、茶碗として使える。それとともに、開発で失われた遺跡の一部を手で感じる事ができる。超縄文の「超」は、英語でいえば beyond である。そこには、縄文が時代の境界を超えて現代のわたしたちにインスピレーションを与えるという期待が込められている。アート&考古学がめざす時代を超えて物事を結び付ける自由な想像力は、これまで気づかなかつた人間、社会、文化の意味や価値を発見するチャンスを提供する。そこからわたしたちの未来像を考えるヒントが得られないだろうか。



自由に気軽に語り合える茶会。「縄文を楽しむ」というゆるい同じさを共有する茶会が、異なる意見(多義性)の共存を可能にする。そこからさまざまな気づきが得られ想像力がひろがる(京都市 京都芸術センター、2015年、森川諒一撮影)



江戸時代の建物跡の柱穴から茶碗の型を写し取る陶芸家の松井利夫氏(京都市、2014年) 出典:京都文化博物館編『アートと考古学展——物の声を、土の声を聴け』61頁、2016年

土偶とエロス

こやまだとむる
小山田 徹

美術家
京都市立芸術大学 教授

曲面の誘惑

長らく土偶に魅入られている。同時に、世界中の太古の偶像に(地母神にも)惹かれてきた。縄文のビーナスや旧石器時代のビーナスたちは明らかに女性像だと思う。土偶には女性ではない像もあるが、女性像について美術家の立場から妄想を語ってみる。

なぜ、これらの女性像に惹かれるのか。わたしの場合、問題は曲面である。ふくやかな曲面や、膨らみから窄まり、細くしなやかに伸びる形、手のひらに収まる感じの丸み、それらが連続して作り出すリズム、なめらかさの質感などの魅力に囚われている自分を自認している。わたしにとって、世界を認識するための方法である「愛」のなかのひとつ、エロス。さまざまな自然物、



1 遮光器土偶

2 合掌土偶

3 縄文のビーナス

4 仮面の女神

5 みみずく土偶

らの手によって作られた。ほとんどは乳房や女性器などを記号的に象徴化したものが多いが、なかには、ふくよかな身体、はち切れそうな膨らみを造形できたものも生まれた。生存にかかわる緊張感のなかで作り出されたものだと思う。

それらの女性的身体の特徴は、自然界の植物や動物のなかにも通底する感覚があり、栗の丸みや窄まり、貝の滑らかな曲面、実の膨らみ、丸い石などに共鳴して造形にも取り込まれていった。

さらに、粘土で造形するとき、ぬるつとした粘土を指で膨らみある形にしたり滑らかな面に撫で付けたりするときには、手の感覚にえも言われぬエロスを感じるのである。石や木を削って滑らかにする場合も同様である。手作業の悦楽と自然造形とのエロスの関係は、殊、わたし個人の感覚であるだけではなく、広く普遍的な感覚として世界中の人びとも共有されてきたのではないかと夢想する。

土偶造形の根源には世界に対する愛とエロスがかかわっている。

土偶マイム

はくちようきようだい
白鳥兄弟 大道芸人

全身タイツとお手軽な小道具で

わたしは横浜にある博物館に勤務する学芸員であり、「土偶マイム」をおこなうパフォーマンス者として活動している。

土偶マイムとは、土偶の形態模写パフォーマンスである。土偶とはおもに縄文時代に作られた土製の人形である。人間のかたちがリアルに写されているのではなく、怪異な姿にデフォルメされていることが多い。土偶マイムではこのようにデフォルメされた土偶の姿を体ひとつで、正確に言えば、全身タイツと小道具を使って表現している。着ぐるみやメイクでもっと写実的に再現することもできるかもしれないが、土偶マイムの目指す方向はちよつと違う。自分の身体とお手軽な小道具でどこまで土偶に近づけられるか、そのズレから生まれる面白さを狙っている。

をすることも多くなっている。

「違う」というツツコミ

それでは、教育普及活動としての土偶マイムの強みは何だろうか。見た目のインパクトやわかりやすさももちろんあるが、博物館学芸員の立場からみると、いちばんは「本物の」土偶を見たらう」ことにあるのではない。土偶マイムを見る人は、必然的に土偶（の写真）と演者を見比べることになる。素直なお客さんだと、「すごい！そつくり！」と喜んでくれる。たまに意地悪なお客さんもいて、「この土偶の足の向きが違うじゃないか」みたいなツツコミを受けることもある。しかしこうしたツツコミは、そのお客さんが（それまでは全然興味のなかった）土偶とわたしを一生懸命見比べてくれたということなので、じつはこちらとしては大勝利なのである。

資料をよく見てもらうということは博物館



六本柱建物の前で
(青森市 三内丸山遺跡、2014年、石井龍太撮影)

土偶マイムを始めたきっかけは、じつは縄文の面白さを伝えたいとかそういうものではなく、もともとパントマイムをやっていたなかで作品のネタとして思いついたものである。とはいえ、なんだかんだ一五年近く演じ続けているうちに、最近は博物館や遺跡公園のイベントに呼んでいただいて、いわゆる「教育普及」活動のお手伝い

でとても大切だが、現代人はどうしてもこゝろで理解しようとするためか、なかなかうまくいかない。解説パネルを読むだけでモノには目もくれずに展示室を通り過ぎるお客さんの姿を見たことはないだろうか。土偶マイムでは、パフォーマンスを通じて自然に土偶に注目してもらうことができる。土偶マイムをきっかけにして、土偶を見てほしい。さらに欲をいえば土器や石器や骨角器などいろんな縄文遺物を見てほしい。そんな思いで、今日も全身タイツを着るの



子どもたちと一緒に土偶マイム
(青森県 八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館、2023年、是川縄文館提供)

- 1、5: 東京国立博物館蔵、出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)
2: 風張1遺跡 国宝 合掌土偶 (八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館蔵)
3、4: 国宝「土偶」(縄文のビーナス、仮面の女神) (茅野市蔵、茅野市尖石縄文考古館提供)



縄文グッズ

縄文土器は現代においては博物館の展示物ですが、かつて縄文時代の人びとが調理に使った「実用品」であることは、多くの方がご存じでしょう。縄文ドキドキ会が取り組むグッズ作りにおいても、日常生活に沿ったものづくりを心がけています。ミュージアムグッズは「記念品」と「実用品」に大きく分けることができますが、縄文をテーマとするのであれば、やはり「実用」であり、身近な日用品であることを大切にしたい、と考えています。

小林 亨 縄文ドキドキ会 代表

有名土偶9点をあしらったTシャツ《土偶NINE》など、オリジナル縄文グッズを展開。ミュージアムショップやオンラインショップで販売をおこなっている（甲府市 山梨県立美術館「縄文—JOMON—展」、2022年）



大森準平《Recomposition Neo Jomon Doki-Kaen》2019年



大森準平《a piece of Neo Jomon Doki-Kaen》2019年

JOMON 魅りと創造
学生時代にずっと野焼きをしていた。黒陶と言われる土器の漆黒の色に魅了され、薪や枝を燃やす最初の行為が僕には心地良く、低火度の持つ柔らかなフォルムが堪らなく愛おしかったからだ。テーマは「日本的なもの」。アニメのキャラクターや家紋などであった。ある時、博物館で見た縄文土器の装飾過剰なモノに身体を包み込まれた。今の僕に何が出来る？ 僕が選んだ方法は米国で開発された鮮やかな色の釉薬と電気窯による焼成だった。

大森 準平 陶芸家

今日の縄文istたち

縄文文化の表現者＝縄文ist その活動をご紹介します



大島托の縄文タトゥー

縄文時代にこの列島を生きた人びとの皮膚は現存していない。だが、世界各地に存在するトライバル・タトゥーや縄文土器のデザイン、顔に線刻された土偶から彼らがタトゥーを彫っていた可能性は高い。大島托は二〇一六年以降、世界各地のトライバル・タトゥーなどから得た知識や技術をもとにこの列島にふさわしい図柄を創造し彫り進めている。あらたな縄文性を身に帯びた縄文人ならぬ「縄文族」は日本人だけでなく日系人にも増えている。

神本 秀爾 久留米大学 教授



儀式中の様子（栃木県、2021年）



儀式に参加する会員2名（大阪府、2020年）

縄文魔女術

縄文魔女術とは、日本におけるモダン・ベイガニズムの実践のために二〇一三年に作られた谷崎榴美による造語。縄文時代から我々に脈々と受け継がれている「かもしれない」眠れる野生を夢想し、それを呼び覚ますような祈りの方法の再構築を目指している。縄文土器、特に香炉型土器や土偶装飾付土器の紋様の再解釈を軸に、時代にとらわれない民間信仰との折衷をおこない、儀式、歌、刺繍や染色作品などを制作している。

谷崎 榴美

彫って月日が経った箇所はダークグレーに落ち着いていく（東京都、2024年、大島托撮影）



数名の会員が交互に紋様を描きながら完成させた刺繍布（和歌山県、2024年）

みんなく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、
詳しくはホームページを
ご覧ください。

みんなく創設50周年記念特別展

吟遊詩人の世界

会期 12月10日(火)まで
会場 特別展示館



関連イベント

みんなく映画会

音楽ドキュメンタリー「The Path

—— パルパティ・パウル 風狂の歌え」

日時 11月23日(土) 祝 13時30分、

15時30分、12時30分開場

会場 みんなくインテリジェントホー

ル講堂(定員350名)

上映作品 「The Path——パルパティ・

パウル 風狂の歌え」(2019年

【申込期間】

▼一般受付 11月20日(水)まで

※友の会先行受付は終了しました。

みんなく創設50周年記念企画展

客家と日本

会期 12月3日(火)まで
会場 本館企画展示場



ミンパクオッタカムイノミ

(みんなくでのカムイノミ)

当館が所蔵するアイヌの標本資料の

安全な保管と後世への確実な伝承の

ために、北海道アイヌ協会の協力を

えて、折りの儀式(カムイノミ)とア

イヌ古式舞踊の演奏をおこないます。

日時 11月28日(木) 10時30分～11時

50分

会場 本館玄関前広場(雨天時は演舞



※一般公開(参加無料、事前申込不要)

のみ本館エントランスホール
2023年のカムイノミの様子

みんなく映画会

みんなくワールドシネマ

「ペトルーニヤに祝福を」

日時 12月14日(土) 13時30分～16時

15分(12時30分開場)

会場 みんなくインテリジェントホー

ル(講堂)(定員350名)

上映作品 「ペトルーニヤに祝福を

/ God Exits, Her Name is

Petrunya(2016年)

司会解説 菅瀬晶子本館准教授

参加費 要展示観覧券(イベント参

加費は不要)

※事前申込制(本人を含む2名まで、

先着順

※事前申込の方へ、当日12時30分

から本館2階会場前にて展示観覧券

を確認後、入場いただきます。

※受付期間中に定員に満たない場合

のみ当日参加を受け付けます。

日時 11月11日(月)～12月11日(水)

▼一般受付

11月11日(月)～12月11日(水)

国家とエスニシティ

——ポストナショナリズム時代の関係

本シンポジウムでは、国家や権力主

体が民族を単位にした市民、国民への

作用に注目し、人々と国家との関係

のなかで民族が実体化されている諸

相を明らかにします。公式、非公式な

関係を通して、民族の存在が人々の

なかで意識されていく過程を考えます。

日時 11月30日(土)、12月1日(日)

10時～17時

会場 本館2階第4セミナー室

言語 日本語・英語

(日英同時通訳付き)

趣旨説明 野村厚志(本館教授)

主催 国立民族学博物館

【申込期間】 11月22日(金)まで

※事前申込制、先着順、参加無料

※詳細は二次元コード

(QR)からご確認ください。

50周年記念・特別研究

国際シンポジウム

点字体験ワークショップ

日時 11月9日(土)、12月14日(土)

12時～15時30分最終受付15時

会場 本館1階エントランスホール

※申込不要、参加無料、当日随時受付

みんなく創設50周年記念・特別研究

国際シンポジウム

国家とエスニシティ

——ポストナショナリズム時代の関係

本シンポジウムでは、国家や権力主

体が民族を単位にした市民、国民への

作用に注目し、人々と国家との関係

のなかで民族が実体化されている諸

相を明らかにします。公式、非公式な

関係を通して、民族の存在が人々の

なかで意識されていく過程を考えます。

日時 11月30日(土)、12月1日(日)

10時～17時

会場 本館2階第4セミナー室

言語 日本語・英語

(日英同時通訳付き)

趣旨説明 野村厚志(本館教授)

主催 国立民族学博物館

【申込期間】 11月22日(金)まで

※事前申込制、先着順、参加無料

※詳細は二次元コード

(QR)からご確認ください。

50周年記念・特別研究

友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先

国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)

E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

FAX 06-6878-3716

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会講演会

参加形式：会場もしくはオンライン配信

友の会会員：無料

一般(会場参加のみ)：500円

※事前申込制、先着順

※11月の友の会講演会は、会員も会場・オンライン配信ともに、事前申込制

※12月の友の会講演会は、会員は会場参加の場合、事前申込不要

第554回 11月2日(土)13時30分～15時
世界を席巻するRAPの魅力

——あなたもわたしも吟遊詩人

講師 矢野原佑史(京都大学 特任研究員)

会場 本館第5セミナー室(定員40名)

第555回 12月7日(土)13時30分～15時
異郷の聖母子たち

——アジアの美術とキリスト教

講師 古沢ゆりあ(本館 機関研究員)

会場 本館第5セミナー室(定員70名)

本講演では、アジアのキリスト教美術のうち、近現代、特に20世紀に焦点を当てます。1920年代から宣教師らにより、中国、日本、東南アジアなど、各地で「現地の様式によるキリスト教美術」の制作が奨励されました。それらは、現地での宣教に用いられたほか、西洋に渡り、博物館や博覧会で展示されました。洋の東西を行き来した聖母子の図像についてお話しします。

会員交流のための企画

中牧理事長の オンラインサロン

日時 11月9日(土)13:30～15:00

今回は、名誉教授の藤井龍彦先生と名誉教授の久保正敏先生も交え、熱量あふれる当時のみんなくを振り返ります。

※会員限定のオンラインイベントです。(事前申込制)

第95回 民族学研修の旅

アルテ・ポプラル

——メキシコの民族芸術を訪ねる

日程 2025年2月17日(月)～25日(火)

【申込締切】 11月14日(木)

Rintaro Ono and Alfred Pawlike 編

The Prehistory of Human Migration: Human Expansion, Resource Use, and Mortuary Practice in Maritime Asia

IntecOpen ※デジタル版はオープンアクセス(無料)

海域アジアとオセアニアにおける旧石器時代における人類移動史を対象に、第一線で活躍する研究者らが最新の考古・人類学的な成果に基づき論じます。とくに旧石器における資源利用や葬墓制に注目した意欲作です。



本の紹介

島村一平 編、ダースレイダーほか 著

『辺境のラッパーたち——立ち上がる「声の民族誌」』

青土社 3,520円(税込)

世界の辺境でラッパーたちは何を叫んでいるのか。彼らの怒りと苦しみは何なのか。本書は、世界の様々な地域のラッパーたちが、それぞれが暮らす世界の矛盾を叫びながら生きている姿を描き出した論考集。専門や手法は異なるものの、現地に密着して取材した「声の民族誌」です。



みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)

参加無料

※事前申込制、先着順(定員320名)

※当日参加申込も可能。当日12時30分より受け付けます。(定員80名)

第551回 11月16日(土)

13時30分～15時(12時30分開場)

サトイモを探り、世界を識る

講師 ピーター・マシウス(本館 教授)

【申込期間】

▶一般受付 11月13日(水)まで

※友の会先行受付は終了しました。

第552回 12月21日(土)

13時30分～15時(12時30分開場)

地域社会で生きること——グローバル化のなかのイタリアの人びとの暮らしから

講師 宇田川妙子(本館 教授)

現代日本において都市への人口集中は社会問題の一つです。イタリアでもその傾向はありますが、生まれた土地での生活を続ける

人も少なくありません。そのイタリアの事例から地域社会に生きることを考えます。



ローマ近郊の町のブドウ祭り (2012年)

【申込期間】

▶友の会先行受付

11月11日(月)～15日(金)(定員80名)

お申し込み先

国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

▶一般受付 11月18日(月)～12月18日(水)

みんなくウィークエンド・ サロン——研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)

儀礼用 仮面(ヤムイモ用)

標本番号 | H0002482

地域 | パプアニューギニア

民族 | アベラム

展示場 | オセアニア展示場



✦ 推しコレポイント ✦

編み編みの技術もさることながら、スマホで後ろから撮影しないとわからない仮面の穴——それは被った者(イモ)にしかわからない「世界の覗(のぞ)き穴」だ。ヤムイモに宿った祖先霊になった気分になんてアガる！(もしかしたら筆者だけでも知れないが)



推しコレ図鑑

イモ仮面…いや、イモ精霊

きしもと タロー 辺境音楽演奏家
大阪大学 講師

生き方を取り戻す

僕は毎年、夏至と冬至に地元で密やかな祭を続けている。それらは地元住民以外参加できないし、冬至祭の方は動画撮影も基本的には禁止だ。僕は普段の音楽活動やイベント企画と区別する意味で、それらを「閉じた祭」と呼んでいる。考えてみれば恋人とのデートに見物客を募る人はいない。家族の催しに観客席を設け集客や収益の結果で成功だ失敗だと騒ぐ人もいないだろう。でも僕たちはそんな奇妙な社会——祭がイベントやフェス、ショーに姿を変えてしまった社会に生きている。子どものころから世界各地の古い文化に心惹かれていたが、いざさまざまな土地を訪れてみると否応なく気づかされることもある。僕たちは多くのものを失った社会に生きているからこそ、失ったものに会いたいと願う。

辺境の音楽文化にかかわってきた僕のような人間が本当に求めてきたのは「自分がフィールドワークされる側になる」ような生き方を取り戻すことだったのかも知れない。

祈りの格が違う！

そんな訳で僕は「音楽文化をゼロからつくる会」なるものを始めたのだが、教育や商業の影響は想像以上に人びとの感性や創造性に影を落としていた。これはもう祭や儀礼——

暮らしのなかの小さな祈りを復活させるところから始めるしかない。こうして、冬至になると精霊の仮面や装束を作り、骨や竹の笛を奏でながら家々を巡る暮らしが始まった。この祭をとおして、僕たちは少しずつ「祈り」というものを取り戻しつつあるように感じている。しかし僕らのお手本ともなったニューギニアはやはり祈りの格が違った！ 彼らは収穫したヤムイモに仮面を被せ祖先霊を招くのだ。イモに顔などあるのか？ イモ用なのにこのキュートさと精巧度はどうだ！？ いや、命を支えるイモだからこそそのハイ・クオリティなのだろう。

僕たちもイモ用の仮面を作らねば……まずはイモ畑を整え、そして一番大きなイモを収穫したら亡き祖父と祖母の名をつけよう(トラキチとクマヨだけだ)。



昨年の我が村の冬至祭精霊たち(一部)。後列中央は筆者(京都府 京北山国地区、2023年)

あの大型展示物はどこへ？

ソロモン諸島国立博物館（首都ホニアラ）

ふじ い しんいち
藤井 真一 民博 助教

文化人類学者がソロモン諸島での調査許可を取得するには、首都ホニアラの中心地にある国立博物館からのレターが必要となる。しかし、わたしは一九九八年に同国で生じた内戦とその後、平和構築について調査しているせいもあって、調査許可を取るために足繁く通うのは

平和構築に関係する省庁である。つまり、わたしが国立博物館へ立ち寄るのはほんの気まぐれ、まさしく「ふらり」なのだ。

二〇〇九年、初めての海外渡航でやってきたソロモン諸島。もともと展示などに関心がなかったわたしは、国立博物館に一応立ち寄っただけだった。ただ、初海外ということもあり、見るものすべてが新鮮だったので、いろいろと写真に収めておいた。それから三年経った二〇一二年、オセアニアで四年に一度おこなわれる太平洋芸術祭がソロモン諸島で開催された。ある演奏集団から記録撮影を乞われて当地にやって来たわたしは、その演奏集団の関係者であることを証すメディアパスの取得が必要となり、博物館の敷地内にあると教えられた芸術祭実行委員会を訪ねた。

驚いた。かつて敷地内の広場に展示されていた各州の伝統家屋や彫像がすべて撤去され、芸術祭の事務局や屋内会場、野外ステージに置き換わっていたからだ。そのときは、かつての展示物は観光客の目に触れやすい芸術祭特設会場に移転されたのだろう、くらいに思っていた。しかし、その後、特設会場があった場所は国立大学の敷地になったり、二〇二三年に開催



博物館内の広場にあった彫像
(すべてホニアラ、2009年)



上：レンネル・ペローナ州の酋長小屋。後ろには官公庁や大使館等が入ったビル（2009年）

下：芸術祭のために建設された屋内会場。後ろに見えるのは上の写真と同じビル（2012年）

を消してしまった。その事情について一〇年以上前に撮った写真を送って尋ねてみた。細かな経緯はわからないが、当時は文化財保存の重要性やその社会教育上の意義が十分に理解されておらず、これらの展示物の廃棄処分を決定したらしい。しかし同時に、かつてあった大型展示物を処分してしまった事実に対して現在の職員らが嘆いていることもわかった。一〇年以上経って、文化財保存に対する意識は大きく変わってきているようだ。

されたパシフィックゲームズの競技場が建設されたりしている。みんなくのように巨大な収蔵庫があるわけではないソロモン諸島で、かつての伝統家屋や彫像がどこかに保管されているとは考えにくい。ふらりと立ち寄った博物館でもっとも

目を引いた大型展示物の一群が完全に姿

軽トラのススめ



荷台に人や太鼓や神輿が乗ることは祭りの風景
(佐渡島、2014年)

作業車として、日本の軽トラックほど有能なものはない。まずは、第一次産業に特化した使いやすさ。農業、漁業に必要なあらゆるものを運んだり積んだりしやすい。コンテナボックスにタマネギを詰めてガツンと荷台に置き、ずらずとスライドしても問題ない。土で汚れても海水で濡れてもさつと洗えばいいし、走るのも家と畑のあいだ

門田 岳久

立教大学教授

なので、汚れた長靴を荷台に雑に投げても大丈夫。座席周りに転がった煙草の吸い殻も空き缶も、まあそのうち捨てればヨシ。車はきれいでなきゃという固定観念から解放され、ストレスゼロである。ちなみに、日本(の都市)ほどピカピカの車ばかり走っている国はそうそうない。

次に、小回りの良さ。道と畦の中間みたいな細いところにも入れるし、路地の入り組んだ海村でも現場ギリギリまで近づける。少々こすっても気にしない。納屋に直付けして荷下ろしできるので超便利(イナカでは歩かないことに価値がある!)。その機能性は、祭りのときに本領を発揮する。家々を廻って獅子舞や太鼓を見せるときにみんなに乗ったり、担ぎ手不足の集落だと神輿も荷台に載せて巡行したりと、行事に軽トラは不可欠である。そして、機械としてのわかりやすさ。以前佐渡島を車で走っていたら、なんと無人の



上：海から揚げた網を濡れたまま荷台にドサツと(佐渡島、2018年)
下：バンコクの通りに並ぶ古いダイハツハイゼット。フロパンガスや古タイヤなど色々と積んでいる(タイ、2018年)

軽トラがこちらに近づいてくる。しかしよく見たら、腰の曲がった小さなおばあちゃんがちよこんとハンドルを握っているではないか。軽トラには難しい機能は何もなく、AMラジオとエアコンぐらいなので、何歳になっても運転できるのである。

要するに軽トラは、日本の農村社会のあり方と一体化した乗り物なのだ。したがって、過疎化は販売減に直結する。「農道のポルシェ」の異名を持つサンバーを出していたスバルも撤退し、製造メーカーはスズキとダイハツのみとなった。その代わりアメリカなど海外では、排気量六六〇cc以下という日本独自の規格が妙に人気を博している。わたしは海外で見かけたら必ず車種年式をチェックし、軽トラの来し方に思いを馳せるようにしている。

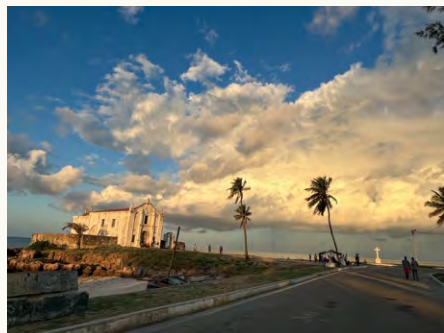
家と近所づきあいがなくなる

まつい あずさ
松井 梓 民博 特任助教



モザンビーク島の女性の近所づきあい

アフリカ大陸南東部の国モザンビークに、その名もモザンビーク島という小さな島がある。わたしは二〇一七年からその島に通い、島の女性たちの近所づきあいについて調



島のシンボルの一つでもあるサント・アントニオ教会。植民地期に建てられ、今は使われていない

べてきた。滞在先の女性マリアモ（二〇二四年時点で三三歳）は、ごく近所の女性たちとのあいだでこまごまとした食材をやり取りしたり、ときにはそのうちの誰かと、皿に盛った料理を日々交換しあう関係を結んだりする。だがこの料理のやり取りは時間とともに途切れ、親しいつきあいの相手は他の隣人へと移っていく。わたしは、そうした関係が近所にどのような広がっているのか、濃密に見えつつも関係が流動的に組み替わるつきあいのなかで、女性たちが相手に対してどのような態度や距離感で振る舞うのかに興味をもって、マリアモの近所づきあいを追っていた。

サイクロンと住まい方の変化

だが、マリアモの近所づきあいの

調査を一時的にでも断念しなければならなくなってしまう。コロナ禍のある年に島を襲ったサイクロンにより、マリアモの夫が所有する家は倒壊した。夜、ものすごい風雨の音がして恐怖を感じ、マリアモは夫と息子とともに隣人の家で寝ることにしてなんとか難を逃れたが、夜のあいだに家は倒れてしまっていたという。それから二週間ほど隣家で寝起きをしたのちに、隣の地区にあるマリアモのおじの持ち家に移ることにした。おじ自身は首都マプトに住んでいたので、その家にはマリアモ家族が寝起きできる空室がいくつかあった。

二〇二三年二月にわたしが訪れたときには、マリアモの家族と父方の親族である若い男性がその家に住ん



倒壊してしまった、かつて住んでいた家（写真はすべてモザンビーク島、2024年）

でいた。「以前の家は売ってしまった」のだという。ある親族がお金に困っていたのだ。

この状況はマリアモ一家にとっては厳しいもので、持ち家がないことは将来にわたって経済的な不安定さを生むし、マリアモ夫婦は「自分の家」を懐かしみそれを失ったことを悲しんだ。人の家に間借りしたり賃借したりするのではなく、「自分の

家」を持つことがいかに大事かをわたしに切々と語った。

そして、マリアモたちの困難には比べようもないが、これまで元いた地区でのマリアモの近所づきあいを追いかけてきたわたしも、調査が突如振り出しに戻ることになりどうしようかと途方に暮れた。二〇二三年二月当時のマリアモはあらたに家を買う夢をもちながら朝から晩まで忙しく外で働いていたし、二〇二四年のなかばに訪れたときには、その家はマリアモの妹夫婦をはじめ、おもにマリアモとその近親女性たちの家族が集まる大所帯になっていて、近所での食べ物やり取りはめっきり減ってしまったのだった。

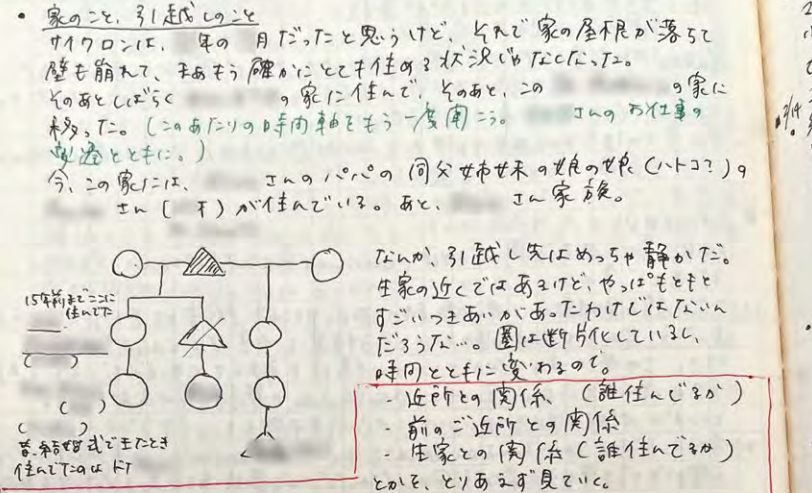
大所帯の家族づきあい

現在この家に住んでいるのは、マリアモと息子、マリアモの妹夫婦と彼らの子どもたち、マリアモの母の妹の娘、マリアモの弟など合わせて一〇人だ。マリアモの夫は、島から一五〇キロメートルほど離れたナンブラ市で食い扶持を探している。少し離れたところに住むマリアモの母親も、午前中で仕事を終えると毎日

顔を出し、昼食と夕食をともにする。マリアモの亡くなった姉の子どももここで食事をする。今、食べ物のやり取りは彼女の母親を起点とした母系親族が中心であり、お金を出し合いながら食事を作って食べる。大所帯なので、近所の誰かにふるまう余裕はなかなかない。

そうした変化を見るなかで、自分の関心が徐々に移っていくのを感じている。調査の対象としていた物ごとがすっかり変容してしまうままならなさや「だって調査だもの」という言葉におさめてしまうこともできる。けれど、ままたらなさはフィールドの人の人生そのもののなかから、ままたらなさが渦中にとどまれないのだ。

大家族でとる食事
左：大きな鍋で米を炊き、いくつもの皿にこんもりと盛る
下：大鍋で練られた主食のシマ（トゥモロコシ粉の練りがゆ）と、魚のココナッツカレー



引越し先の家を訪れた直後に書いたフィールドノート。率直な雑感が書き込まれている

母はおなかからっぱを見逃さない!?

かわもと なおみ
川本 直美

岡山大学 客員研究員

まだ薄暗さも残る朝6時過ぎ、眠る村を起こすように爆竹とバンドの音が鳴り響く。メキシコ西部ミチョアカン州T村のカトリック祭礼は朝が早い。標高1980メートル、針葉樹林に覆われた山間部にあるその村では夏でも朝晩は冷え込むため、わたしは5時半ころに起きて最低限の身支度だけして会場に向かうつもりでいた。朝食はいらない。早朝から村祭りがあるときには役員の女性たちから参集した人びとに、コーヒーの粉と砂糖とシナモンを鍋に入れて煮出したあったかいカフェ・デ・オジャが振る舞われるからだ。これが甘い。眠気も吹き飛ぶくらい甘くて、お腹もなんとなく膨れてくる。

それを当て込んでギリギリまであたたかいベッドで粘り、朝食抜きで飛び出して行きたいのだが、これをわたしの「村のお母さん」である滞在先のファティさんは許さない。押し問答の末、わたしたちが見つけた落とし所が日本でもおなじみのヤクルトである。出発前にヤクルトを飲んで空っぱの胃になにか入れていくことで「お母さん」はやっと納得。以来毎月のように行われる祭礼や、毎週日曜の朝早くから開かれていた祈りの会に向けて、ファティさんは週に一度の定期市で買ったヤクルトをそっと冷蔵庫に入れておいてくれるようになるのである。

ファティさんの娘セシーも似たようなものだ。セシーは毎朝出勤前にシャワーを浴びて身支度にたっぷり時間をかける。メキ

シコでは身なりが重視されるからだ。もはや朝食を食べる時間もその気もないセシーに、ファティさんはフルーツと牛乳をミキサーしたジュース「リクアード」をそっと用意しておく。早足で食堂にきたセシーはリクアードをぐびっと飲んで^{きっそう}と職場へ向かう。

じつのところ女たちにとってこれは武勇伝でもあるのだ。「どんなに忙しくても子どもを空腹のまま行かせたことはない。たとえリクアードだけでも飲ませたのよ」という話は他の人からも聞いたことがある。昼食を2時から3時と遅くにとるメキシコ人たちは学校や職場で合間に軽食を食べたりするので、それでもなんとかなるのであろう。

ああ、優雅な朝とはいはず。 「子ども」というのはぐびっと飲んで学校や仕事、ときには調査に飛び出して行くものなのかもしれない。よし、ジャ・メ・ボイ！（行ってきます！）



祭礼に参集した人びと。手にはカフェ・デ・オジャ
(メキシコ ミチョアカン州 T村、2015年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西英里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

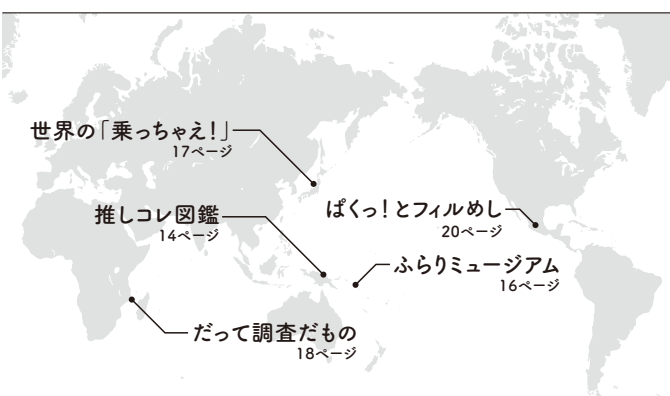
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

ありくまのもう「蟻の熊野詣で」ということばさえ生まれた中世の貴賤を問わぬ熊野巡礼ブームは、都人にとってもはや異世界であった縄文への文化回帰の情熱であった(梅原猛「私の熊野」)。だとすると、中世のは信仰という無形の縄文ismの発露だった。いっぽう、今、ものづくりや表現芸術の分野で起きている「縄文ルネサンス」は有形の縄文ism。だが本号特集で、有形のモノを直接扱う考古学には後景に退いてもらった。縄文時代、と名づけたのは大森貝塚発見で有名な E. S. モースだが、縄文文化について語るのはとくに考古学者や歴史学者の専売特許ではない。

本号の主役は新しい令和の縄文istたち。「巻頭エッセイ」の警田亜紀子さんもそのひとり。女性の縄文istはまちがいに増えている。とはいえ本特集を企画した河西英里子さんの指摘のとおり、図らずも本号特集の執筆者は男性に偏っている。たしかに縄文とジェンダーも大きなテーマである。(樫永真佐夫)



次号の予告 12月号

特集「ペーパーレス時代の紙」(仮)



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

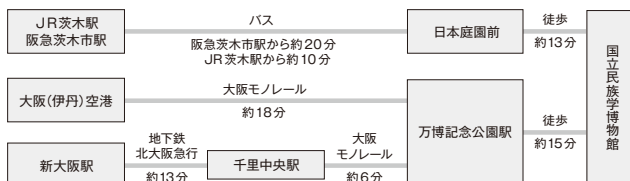
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



ひとりひとりのご参加が、 国立民族学博物館と友の会の活動を支えています。

国立民族学博物館友の会は、国立民族学博物館(みんぱく)の活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。21世紀は地球上のいたるところでおたがいを認めながら、ともに生きてゆく考え方が求められています。世界の暮らしの多様性にふれ、それを解き明かす文化人類学・民族学の知見がますます重要になっています。みなさまのご支援とご参加をお待ちしております。

訪れるたびに発見がある 博物館を 何度でも楽しめる

年間何度でも本館展示と特別展をお楽しみいただけます(一部の特別展は割引料金適用)。館内で開催する催しへの参加もスムーズ。研究公演など一部の催しの参加の参加会員優遇枠もあります。

さらに踏み込んだ話題提供 友の会講演会 年12回開催

人びとの営みの真髄にふれる

『季刊民族学』 年4回発行

友の会の機関誌。世界の諸民族の社会や文化に関する正確な情報を平易かつ読み応えのある文章、豊富なカラー写真で紹介する、あなたの知的欲求に応える市民向けビジュアル学術誌です。



最新の情報をいち早くお届け

『月刊みんぱく』 年12回発行

『月刊みんぱく』はみんぱくの広報誌です。展示や催しの情報のほか、資料の解説や現地の様子、調査の動向を親しみやすいエッセイやコラムで紹介します。



お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつでも、どなたでもご入会いただけます。

国立民族学博物館友の会

公益財団法人 千里文化財団

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

入会方法は友の会ホームページに記載しております。



国立民族学博物館友の会機関誌『季刊民族学』のご案内

最新号

『季刊民族学』190号

ISBN 978-4-915606-93-9

[国立民族学博物館 創設50周年記念 特集]

私たちが歩んだ半世紀

国立民族学博物館が創設50周年を迎えた。半世紀を経てみんぱくは世界第一級の博物館に成長したが、この間、私たちはどんな経験をしてきたのだろうか。私たちの社会、文化はどのように変化したのだろうか。日本社会の「いま」を確かめたい。

西田 慎/縄田 浩志/鈴木 宣弘/太田 俊寛
輪島 裕介/栗田 宣義/床島 郁哉/及川 昭文
岸上 伸啓

連載 フィールドワーカーの布語り、モノがたり 第8回
「伝統」を継ぎ接ぎする
——トルコ絨毯の新たな展開

田村 うらら

ほか

『季刊民族学』189号

ISBN 978-4-915606-92-2

[特集]

先住民のデジタル世界

——ありふれた日常実践と、あらたなる挑戦

日々の暮らしやこれからの社会を変える、先住民コミュニティのデジタル世界の可能性を探ります。

平野 智佳子/栗田 梨津子/土井 冬樹
山越 英嗣/額田 有美/渡辺 浩平
神崎 華人/長岡 慶/北原 モコットウナ

ほか

188号 ISBN 978-4-915606-91-5

[特集] シン・シャーマニズム論——カミとつながる技術

187号 ISBN 978-4-915606-89-2

[特集] 境界をゆきかう日系人

186号 ISBN 978-4-915606-88-5

[特集] 争いの終わらせ方——紛争解決と共生の人類学



表紙:民博誕生前夜の創設準備室 大阪分室
提供:国立民族学博物館
A4判・104頁 2024年10月31日刊行

講読方法

国立民族学博物館友の会の維持会員、正会員のみなさまには、年間4冊お届けしております。

おためし購入は一般価格:2,750円(税込)、会員価格:2,200円(税込)。郵送の場合は別途発送手数料をご負担ください(会員は不要)。

『季刊民族学』は国立民族学博物館ミュージアム・ショップで販売しております。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

オンラインショップ「World Wide Bazaar」

<https://www.senri-f.or.jp/shop/>

E-mail shop@senri-f.or.jp



オンラインショップ

国立民族学博物館友の会(公益財団法人 千里文化財団)

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



友の会

お問い合わせ